

むすめかけきよやしまにつき 嬢景清八鳴日記

〔解説〕享保十年（一七二五）に初演された西沢一風らの「大仏殿万代礎」を若竹笛躬らが明和元年（一七六四）に改作したのですが、「花菱屋」「日向嶋」は前作をそのまま使っています。頼朝に投降した後自ら眼球を抉って盲目となったと言われる平家方の侍大将悪七兵衛景清の伝説を脚色したもので、「花菱屋」では登場人物が端役に到るまで個性豊かに描かれています。生き仏のような好人物で念仏三昧の花菱屋の長、対照的にしまり屋で口うるさく人使いの荒い女房、情に厚い善人ではあるものの商売柄抜け目のなさも見せる左治太夫、遊女たちがなけなしの餞別を贈るのに引き替え、口先だけで暇乞いをする遣手。その中で景清の娘糸滝の父親を思う純粹さが浮き彫りとなっています。餞別の場面からは曲の調子も高くなり華やかな節回しとなります。

〔あらすじ〕駿河の国手越の宿の遊女屋「花菱屋」に、肝煎り左治太夫が十四歳になる糸滝を連れて来ます。糸滝は実は平家の残党悪七兵衛景清の娘で、育ての親の乳母が死に、その遺言で景清が盲目となつて日向の国に知っていることを知り、父親に官位を取らせて一生安楽に過ごさせるために我が身を売りたいと言います。その孝心に感じ入った花菱屋の長は、入用な金と父親に会つて来る間の暇とを与え、左治太夫に供をさせます（花菱屋の段）。

日向で景清と対面した糸滝と左治太夫は、糸滝が相模の国の大百姓に嫁入りしたと偽つて金を渡しますが、景清は大名の娘が百姓の嫁になったことを怒つて二人を追い帰します。しかし景清の行為は、父親が罪人であることで糸滝に難儀が及ぶことを案じる心からのものでした。糸滝の残した手紙から、実は遊女屋に身を売ったことを知った景清は、それまでの片意地な心を捨てて頼朝に従います。

花菱屋の段

楊竹亭が読みし妓女の詩、人の城を傾くるとい

へども、人の気につれ日の本の、契る情けと書き改

め、契情と読む大ぬさや、大磯小磯化粧坂、それに

上越す手越の宿。海道一の遊女町花菱屋の長といふ

色商人、よい人柄と指折りの数にはもれず家富みて、

世話を後生にすり抜けて、よねの掛引諸事万事、皆

女房の取り賄ひ、油断させぬ人使ひ、

「コレ見世の女郎衆や、太夫衆並みにまだ身仕舞ひ

仕舞はぬか。精一杯花の飾りたいよく目でさへ、べ

ん／＼たらだら余りで興がる、口早やに御台も頂き、

きり／＼手ばしかう見世付けせうぞや。ヤイ男共、

見世門の掃除済んだら、湯殿から料理場の竹縁の繕

ひ、手を揃へ昼までに仕舞うてのけ。ヤ、料理場で思

ひ出した。コリヤ玉よ、タベの肴別条ないか。猫に取
らせたら給銀で引くぞよ。ヤ引き序でに人の鼻長作

の婆。味噌の粉が切れたといの。し／＼らびしたら小

麦の粉、今日の内に引いてしまや。コレ、こゝから見

えぬとてくすねまいぞ。松はお寺へ明日の齋米持つ

て行き、戻りに鯉屋で泥鰯一升取つて来い。禿共、

手代はりに来て白髪抜け。遣手衆、花に目がくれて

猥り見逃しすまいぞや。サ、サ、サ、皆言ひ付けた

事合点か」

と、取り替え引き替へ一年中、喚くばかりも家の内、

十八種明かし暮しける。看経に余念なき、耳には暫

し聞き辛く、長は称名唱へさし、

「コレ鼻。いつとても他の事は言はぬ。なぜ内外の

者を敵の様に、間がな隙がなせはりやるぞいの。使

はるゝ者は主頼み、使ふ者は下人を力、深山中に這

ふ蔦かづら、垣根に植ゑる朝顔も、ひとり立たれぬ世の掟。今日一日で見果たす世の中でもおぢやらぬ。長い月日に短い命、今日仕舞はずば明日もさせ。明日残つたら明後日でも、間にさへ合はゞ見ぬ顔して、ちつと油断もさしやいの。嘸、嘸、コリヤ嘸」

「エ、やかましい聞きともない。看経するなら仏ばかり拝んでゐたがよいわいの。こなたがそのぐつしやり故、まかづらを見抜いて女郎共は、勤め粗末に間夫まぶ狂ひしたいがい。下々は野良のかはきがち。親方の鼻の穴で、コレ隠れん坊せうとするわいの。まだがみ／＼言へばこそ、しづ／＼にも手が廻れ、一町三所にも帳がくろめ。おれ次第に黙つて、内の事構うて貰ふまい。エイ、きり／＼とかけ碁でも打ちに行かしやれ、行かしやれなう」

「オ、行かうと思ふてゐる。ガ行くに女房の足は頼

まぬ。昨日象碁屋しやうぎで、願齋坊が因果経の話に、前生

で牛が川へはまつて死んだ、その報ひによつて、今生で川が牛へはまつたと言はれたを、合点がいかぬと思ひしが、今読めた。女郎共が客衆に買はるゝも、前の生で買ふた報ひ。下々がそなたに責め使はるゝも、前生で責め使うた報ひ。またこの長が今女房の尻に敷かるゝも、新枕の夜から辞儀なしに上へ、ハ、ハ、ハ、ハ、その報ひでかなある。これにつけてもいよ／＼後生が大事々々」

と、立ち出づる門の口。奉公人の肝煎りきまひ左治太夫さじだゆう、十四五の娘引き連れ、御機嫌取りの軽薄顔、

「ヤ旦那様、いづくへお出で、ちとお見舞。いつ見てもお家様お健まめさうで、御重畳」
とやすらへば、

「オ、奇特に奉公人がなければ、足踏みもせぬ左

治、あるかしていそ／＼わたしたよ。サ、サ、煙草、コレ茶を進ぜよ。幸ひ欲しかった。しらものでも仕替へでも、鼻に見せて相談めさ。去冬陽氣の喜左が手から抱へた疵者、いき戻つて苦は絶えぬ。コレ、その手なら厭ぢやぞや」

「アイヤ申し旦那、陽氣とこの男と一口の仰せはお情けない。まづ見せてびつくりさせましょか。イヤコレお糸、お糸、大事な、入りや、入りや」

「アイ」
と答へて、誰がいとしと撫子の、花の萎れし如くに
て、

「皆さん、御免なさりませ」
と、愛敬こぼれし顔形。女房見るよりはやつかみ面、
「傍へ／＼」

と呼びこまづけ、立たせつ据ゑつ歩かせつ、

「背もすらりとよい肉合、年はいくつぞ。二十四、ムウ十四にはおとなしい。爪はづれ尋常なり。肌もやわ／＼、いやしう育たぬ人と見た。父親が呑み果てか、打ち果てか、母親がかいしよなしか、今からおばが可愛がる、オよい子やの。ヤアコレ左治殿、内証の疵は運次第。請判さへ慥かなら今金渡す。来年までをすたりにして十年がらり三百貫。こなたへ大儀代二石疋。サア／＼うつまいか」
と欲しがれば。

「イヤモ、旦那を見込みに連れて来た奉公人。お目に留ればまづ珍重。が申さぬことは聞こえぬ。この子には親判、請判の捺し手が合点か」

「ア、つがもない。請けに請けを取つてさへ小言がちのこの商売。判のない者誰が抱へう。さてはこの娘、おこしぢやの」

「アイヤ、勿体ない、遠国他国の者でもなく、すなはち親元はこの村。あなたへも濯ぎ洗濯、御用の時は備はれし、里はづれの梅檀の木婆が娘でござりますわいの。モ親元たしかにありながら、請判親判のないと申すその子細は、廿日以前にかの婆がほつくり往生。親一人子一人、モ一門縁者のきれはしもなく、木から落ちた猿とは不憫なこの子が身の上。一昨々日の夜、私所へ秘かに参り、『遊女奉公させてくれ』と段々の頼み物語。尤もなところを聞届け、町家へ年切つて腰元奉公にと思へども、その分では金が届かず。と言ふて親請もない子。遊女には肝煎られず捨て、は置かれず、詮方余つて右の段々。名主殿から代官様のお耳へ達し、『苦しからず左治太夫、肝煎つてとらせ』『ハ、ア畏つた』と御前の赦し。天下晴れての奉公人。お聞きなさるりやつ

ひ知れる。左治が嘘つかぬ性根も御存知。親判、請判、肝煎判、かいくるめわれ等一人の請合ひ、氣遣ひ晴れてお家さん、アよい奉公人ぢやがの。抱へる気はござらぬか。外へも見せて見ましょか」

と、詞も顔の色品も、偽りならず見えにける。

「ホ、聞き分けた左治殿、疑ひない。こなた一判で抱へるとも、必ず外へ見せまいぞや。ム、さては婆は死んでか。ア、いとしや悲しからうの。ガそんな娘を持つてとは沙汰にも聞かず、知らなんだ。出入雇も多けれど、分けて恩見せた婆の娘、その恩の返報しや、ではなけれども、マア百貫値を負けたら死んだ人の追善にもなりさうに思はる。ノウ左治殿、二百貫ではなんと」

「ハテモ、分一を取る品ならば負けふ負けまいわれ等の役。とても入立ての奉公人。この子が望みさへ

叶へば、他には一銭の余慶もいらす、三百貫を一貫にも直々の恩相對。コレお糸、道すがらも言ひ聞かす如く、お家さんは慾面よくづらが引張れども、さすがは女性、鬼神程にむごうもない。また旦那様は腸持わたちの阿弥陀如来。打ち明けて御夫婦へ、お嘆き申しや」とありければ、怖々疊に手をつかへ、

「旦那さん、お家さん、おむつかしながら聞いて下さいませ。私が母様仮初めのでけ物、後で聞けば傷ようといふ生きぬ腫物。廿日以前に御臨終。今際の枕に私を近付け、『今日までみづからを生みの親と思ふて母よ母よと勿体なや。今死ぬる故打ち明ける。私はあなたを育てしお乳人、真実の親御外にある。天が下に誰あらん、肩を並ぶる人もなく、由緒正しき大名のお娘御なれども、子細あつて二つのお年、親子御あかぬ別れ、別れ。その御印は肌にかけてさせ奉る、一

寸八分の閻浮檀金えんぶだごんの觀世音。それより乳母が手に三年育てはごくみ、人となし参らせし。風の便りの伝手聞けば、誠の母君は御病死。父御は日向の国宮崎といふ所に、盲目の乞食こじきとなり、未だ存ながらへ給ふとは聞けども、日向は西の果て日本の国外れ。この乳母が貧しき身の年も老ひ衰へ、連れて往て逢はせます事も叶はず、時節をくくと送る月日も今日見納めのわが命。ア、死にともない死にともない、後心引かるゝ。誰かわれになり代り見育てゝ参らせん。雨露に身を痛め、凍えや仕給はん、飢えつか勞れや仕給はんと、案じる苦しみは地獄道、餓鬼道、とても仏には得なるまじ。苦患くげんの中にも魂通ふ隙あらば、影身は放れぬ。心強う成人して、父上に尋ね逢ひ給へ。それが弔ひ御回向ぞや。大名の胤なるぞ、卑怯未練の氣を持つな』と、齒をがたゝと身震ひし、悲しやつ

ひに死にました」

と、身を伏し焦がれ泣きぬたる。邪見につるゝ婆婆
惜しみ、女房死に沙汰聞き辛く、

「ア、忌々しい置き兼ねたかなんぞの様に、生々し
い死人のうちからその奉公人、たゞでも置かぬ左治
殿。とつとゝ連れて往なしやれ。なんのあの子が大
名の娘、あた僭上な」

と言ひまくれば。

「コレ嘯、わり様も昔はこの長が家の飯焚き、今で
はお家様と言はるゝでないか。米洗うた白水の流れ
と人の行末、知れぬが浮世。またしても口汚なう、人
の愛想尽かしやるぞいの。それにたゞでも奉公人い
やとは金の出ぬがよけりやこそ、価をねぎるぢやな
いか。この奉公人、見所聞き所がある。そなたに構は
せぬ。黙りや、黙りや、テサテ黙つて居りやらうぞ。

娘、テさていとしやの、泣かずと語りや。シテその後
はなんとしました」

と、言ふ声共に曇らせり。

「されば、近所辺りの御介抱、亡骸は土に片付けて
も片付かぬは私が身の上。十歳に余る養育の恩、誠
の親の生みの恩、かたがりならぬそのうちにも、冥
途の乳母の遺言。『成人して父上に尋ね逢ひ給へ。そ
れが弔ひ回向』との形見の詞。一時も早ふ盲目の父
の苦しみを救はんものと心は思ひ定めても、する業
知らぬ女の悲しさ。泣いてばかり過ぎつる夕暮、
ふと座頭衆に出合ひ、余所ながら裏問へば、『座頭仲
間の習ひにて、官に登ればそれぞれに食ひ分備はり、
一生は飢多凍えず。その価あたひ五百貫、あるひは百金で
済む事。我々も鎌倉より、只今都へ官に登る』と、仮
初めの物語も、私が肝に沁みつく如く、ア、羨まし

や、父上にもその官がさせましたや。たとへ海山を隔て、住むとてもひもじい目寒い目させませず、せめて御恩の片端も報じたや送りのたや。金がな欲しやと心付き、十日ばかりこの方奉公の口を聞き立て、

この身を一代売切つても、町家で百金の値はなく、大磯化粧坂、この里の勤めは年次第、いくらでも金があると、常々聞いた事もあり、左治様頼んで、いかにお世話をかけます。日向にござんす盲目の父上に官をさせまし、一生養ひ殺す程と、今生で父のお顔一目拜んで帰るその間のお暇と、乳母の石塔建つる程価をさへ下さんすりや、十年が二十年、命ありたけ御奉公、骨になつても御恩は忘れぬ。旦那様、お家様、お蔭、お慈悲」

とばかりにて、袂を被ひ咽せ返れば、左治大夫も力を添へ、

「天道に蹴殺され、女房子供を見ずに果てう。今の詞に微塵毛頭偽りなし。哀れみ給へ」

と取りなしに、貰ひ涙を添へにける。急に返事もないじやくり、長は両眼泣きはらし、

「この春の彼岸に極楽寺の快尊和尚が説法に述べ給ひし、唐土四百余州の内に孝行な子がわづか廿四人に限らうか。国が広ければ人も無量、殊に五常を尊ぶ所なり。深山の木の葉浜の真砂、詠むにも数ふるにもその数は尽きせねども、廿四孝と書物に書き抜いて、末代人の鑑にするはどうともかうとも言はれぬ、真実心の勝れた所がある故と仰せられし、まつその如く、誰がすき好んでこの里の勤めに出る者一人もなく、大なれ小なれ親のため、孝行でない子はなけれども、その中にこの娘の孝行、有難しとも奇特とも、この長などが口にかけるも勿体ない。年な

十年なら十年にして、長が心にあること。左治殿、娘、今日只今より抱へた。望みの通り日向へ往て、父

初の顔見て来る暇もやりませう。身の代も百金には限らぬ、千金でも入用程貸しませう。お乳母の石塔も留守のうち、結構に拵へさせ、戒名刻るばかりにして置きませう。オ、道理、嬉しい筈ぢや。こなたの様な人に金出せば、出しながらおれも嬉しい、嬉しい。コレ鼻、ドレ腰な鍵おこしや」

と、言へどもぴんと捻ぢ向いて、返答もなく身を拗ねる。

「エ、その眼面つきなんぢや。鍵おこさぬとて、おれが金をおれがまゝにせまいか」

と、立つて箆笥の錠前を、木枕取つてぐわつたぐわつた、堪へ兼ねて女房、

「コレうつそり殿、孝行ごかしの騙りに合ふて身上

棒に振りやるかいの。なんぼでも金は出させぬ」

と、むしやぶりつけば、

「ヤイヤイヤ、こゝな物知らずめ。孝行ごかしであらうが騙りであらうが、当る罰はあつちの罰。騙られた者の苦にはならぬ。これ程見え透いてあかりはしる大孝行、カを添ゆるこの長は、アレお天道様の方人。身代限り役に立てゝても、惜しうも悔しうもなんともない」

と、突退け跳ね退け錠打ち外し、手にほうばる程掴み出し、

「コレ店格子の女郎衆下々共、この娘が日向への旅出立、言ひつけるではない、道の餞別、心次第」

と、二人が前に並ぶる金より心の定め。

「手形は急がぬ期しての事、寸善尺魔隙入れてさゝはりあれば無足する。せはしくとも今日門出。海山

かけし永の旅、一人はやられず、若い者も付けられず。オ、乗りかゝつた不承ぢや。大儀ながら左治殿、われに代つて道すがら介抱頼み入る。お宿の後の賄ひは、不自由させずこの長が、呑み込む」
腹は武蔵野や、喉は鎌倉海道に、またあるまじき親仁なり。

「ア、有難いとも冥加ないとも、御礼申すは結句はばか憚り。健めでやんがて立ち帰り、身を粉に砕いて御奉公。ナア左治殿」

「オ、それく、それが肝腎かんもん。ヤ、道中の介抱望んでもわれ等引かれぬところ、御指図にはもれまじ。こゝにてとかく申す程お世話の上塗り。宿所にて用意致し、行かるゝだけは今日門出。娘、サア立ちや、いざお暇」

と立ち出づる。数多の遊君走り出で、

「コレ申し娘御様、雨につけ風につけお身の勞り頼みやんす」

「お盛んで帰らしやんせやいの心ばかり」

と紅白粉、元結延べ紙櫛油。遣り手仲間は巾着の、口先ばかりで暇乞ひ、針と五色のいとしやと、おはりが情かけ針や、久三きゆうぞうが草鞋竹わらじの杖、飯焚く女めしごが飯行李りに、心一杯餞別を、見るを見真似に主の妻、

「なに言ふも皆長殿よかれおれよかれ。みな衆さへする餞別、おれが負けて立つものか。十年の極め五年にして、五年の年を餞別」

とて、鼻にかけるも慈悲は慈悲。長と夫婦のなかなかに、内も賑々行く人も、心賑々西の海、日向へとてこそ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。